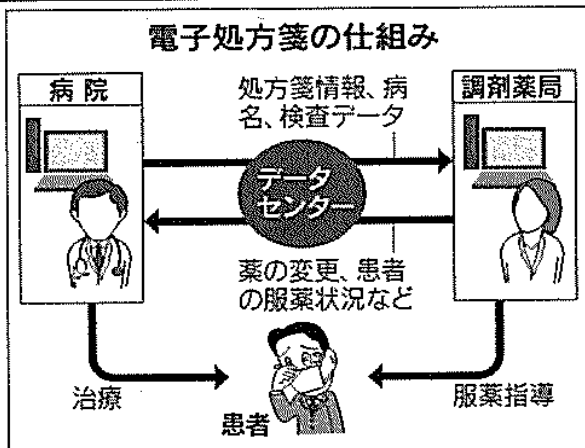


香川など3大学

病院・薬局間で電子処方箋

県内でネット
ワーク実験 病歴や服薬歴共有

香川大学、徳島文理大学、香川県立保健医療大学の3大学はこのほど、病院と調剤薬局との間で電子的に処方箋をやりとりできるシステムの実証実験を始めた。香川大医学部の付属病院と県内30の薬局とをネットワークで結ぶ。医師と薬剤師が、患者の病歴や服薬歴などの情報を共有し、副作用の防止や効果的な治療に役立てる狙いだ。



副作用防ぎ効率治療

電子カルテは全国の病院で普及が進んでいるが、電子処方箋は全国的にも珍しいという。来年度以降、2、3年間をかけてほかの病院や薬局にも対象範囲を広げ、実証実験を続けていく方針だ。その後、実用化につなげたい考えだ。

香川県で運用されている電子カルテ共有システム「かがわ遠隔医療ネットワーク」(K-MIX)を利用して開発した。インターネットを通じ、処方箋や電子カルテの一部情報を共有できる。病院と薬局との間では、紙の処方箋をやり取りするのが一般的だ。病名や検査データは書かれていないため、薬局が患者から聞き取りしているが、すべての患者についての情報を把握するのは難しかった。

薬局側で後発医薬品に薬を変えた場合や患者の服薬状況、ほかの薬の服薬履歴などを把握して、医師側に伝える方法がなかった。

今回の電子処方箋のシステムは、医師と薬剤師との間で双方向でコメントをやり取りし、病院と薬局が一体となったチーム医療につながる。薬局は病名や検査データを把握し、患者に対するより適切な服薬指導につなげることができる。医師と薬剤師が患者の薬歴などを共有することで適切な薬を選択し、副作用を防止することも期待している。

今回の実証実験は、電子処方箋について説明を受けた患者のうち、希望者に利用してもらう。当初は3月末まで香川大医学部付属病院や県内30薬局で実証実験を行い、効果や課題を検証する。

システムを利用する際には、医師や薬剤師一人ひとりに専用のIDを配布する。IDが無ければ情報は閲覧できない。職種によって閲覧できる情報を制限しており、個人情報流出を防ぐ。